

令和 5 年 5 月 10 日現在

機関番号：43502

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K01579

研究課題名(和文) 初期近代ブリテンにおける紙券信用と基金をめぐる議論の継承について

研究課題名(英文) Early modern British controversy over paper credit and funds

研究代表者

伊藤 誠一郎 (Ito, Seiichiro)

大月短期大学・経済科・教授(移行)

研究者番号：20255582

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、金融の可能性と不安定性の問題を、17世紀末の土地銀行企画家たち、チャールズ・ダヴナント、ジョン・ロー、サー・ジェームス・スチュアート、アダム・スミスらがブリテンで展開した紙券信用論の継承関係に焦点をあてながら検討する。これらの議論においては、紙券信用の量的無限性が力説される一方で、紙券の過剰発行の危険、銀行経営の破綻が常に懸念され、そうした問題に対する対策として、紙券信用の裏づけとなる、担保、基金をいかにして十分なものとし、それが組織としていかに信頼に足るように管理されるべきかが最大の検討課題となっていたことを示す。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代に至るまで金融危機が起こるたびに、それはなにか例外的な悲運のように語られ、道を踏み外した自らを戒めることが繰り返されてきた。しかし、そもそも「近代」というものを作り上げていった近代初期の思想家たちは、危機とは必然的に、そして生来的に我々の社会が抱えているものであり、それを普通ではない、anormalなものではなく、むしろ常に内在するものと考えていた。本研究では金融に関する思想史を振り返ることによって、彼らが知的に葛藤したのは、anormalなものを排除するのではなく、どう共生するかにあったということ、現代人に喚起することに本研究の学術的・社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)：This study examines the issues around the potential and uncertainty of credit by focusing the consecutive discussions about paper-credit which were evolved in Britain by land-bank projectors in the end of the seventeenth century, Charles Davenant, John Law, Sir James Steuart and Adam Smith. I demonstrated that, on the one hand, these discussions emphasised the quantitative unlimitedness of credit, but, on the other hand, they were concerned about the danger of over-issue and the collapse of bank-management and their most essential issues were how to make a sufficient fund or security to underpin paper credit for remedying the problems and how to make such an institution reliable.

研究分野：経済思想史

キーワード：初期近代 イギリス 銀行

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

アダム・スミスが『国富論』で、真正手形原理を守ることによって紙券信用の拡大と経済規模の拡大はインフレを伴うことなく併存することを示しながらも、他方で貨幣数量説の側面も見せた。こうした貨幣・金融理論において必ずしも相いれない二側面は、地金論争、通貨論争、そして現代に至ってなお未解決で深刻な経済の論題であり続けている。しかし、そもそもスミスが『国富論』第二編第二章において自らの紙券信用論、銀行制度論を作り出した背景には、ジョン・ローのシステムの失敗への反省や、スミス自身が同時代人として目の当たりにしたスコットランドの銀行倒産への憂慮があるといわれてきた。いわば、それまでの野放図な金融拡大が、より安定的な金融制度の必要を生み出し、スミスが理論的にそれに答えたのだと。実際スミスに至るまでのブリテンにおける金融は、**J. K. Horsefield** のいう一連の「貨幣的実験」による紙券信用という新たな貨幣製造マシンの創造が、貨幣と資本の無限の拡大を技術的には可能にし、またそれと並行して未整備の証券市場では投機の過熱の結果として南海泡沫事件を引き起こすという過去を抱えていた。そしてこうした未成熟な金融市場への警戒が、スミスにその解決策を考えさせたのだと語られてきた。

本研究は、こうした創造、混乱、整備というブリテンにおける草創期の紙券信用、金融制度をめぐる議論の理解を、17世紀末のさまざまな土地銀行設立案とそれをめぐる論争、その後登場するダヴナント、ジョン・ローなどの「信用」をめぐる体系的・理論的な議論、そうした一連の議論を踏まえて書かれた、サー・ジェームス・スチュアートとアダム・スミスの信用論へと連続する、同じ用語と問題意識を継承する議論としてとらえ、幅広い一次文献の文脈のなかでの再検討する。そのことによってこの時代の人々が紙券信用について語るときの最大の関心事は何であり、彼らは何を求めていたのかを明らかにし、ここでは直接は扱わないものの、そもそも紙券信用とはいったいどのようなものなのかを再考する一つの、しかし本質的なヒントを提供することを目的とする。

## 2. 研究の目的

本研究が、明らかにしたいことは大きく分けて二点ある。第一に、17世紀のさまざまな銀行案に見られる紙券信用論は、いかに多くの紙券を発行するかではなく、むしろいかにその発行量を抑制するかが諸提案の争点であり、スチュアートやスミスにいたるまでの紙券信用をめぐる議論はこの文脈の上にあったということを示したい。第二に、こうした紙券発行量抑制の議論は、提案されている銀行の紙券信用がいかに信頼に足るものであるかを示すために、その銀行の組織としての物的、人的信頼性を示す要素の一つとして論じられていたということを示す。イングランド銀行設立とその存続は、その信用の裏付けとして貴金属準備をおいた商業銀行が資本主義において金融制度の礎となる必然性を証明しているかのごとく語られてきたが、少なくともスミスによって近代の銀行制度の基本的枠組みが明示されるまで、そのスミスも含めて、貴金属との兌換を前提とする銀行制度の優位性は決して自明のものではなかった。それが金・銀であれ土地や質であれ、より信頼のおける基金、抵当、担保、それを適切に管理できる能力をもつ銀行こそ、諸銀行提案者には推奨されてきた。

### 3. 研究の方法

本研究では、第一に(1、2年目)、名誉革命以前のイングランドにおいて、銀行制度を議論するときに、担保、抵当、基金といった言葉で表現される、紙券の価値の裏付けへの信頼、確かさが重要であるということについて論じた、わたくし自身の英文著作の刊行に向けての作業をすすめる。これはこの後に続く本研究のテーマを提供し、かつ前提となる研究である。第二に(1、2年目)、17世紀後半に少なからずあった、短期公債などを紙券として用いる諸提案を分析し、ダヴナントの信用論をこの文脈のなかで明らかにする。ダヴナントの信用論は、ダヴナントの同時代人にとっても、また今日の歴史家にとっても大きな関心と呼ぶものであるにも関わらず、ダヴナントの推奨する信用は、銀行の発行する紙券ではなく、割符という短期国債であった。ダヴナントは、信用は人々の信頼に基づくとし、彼が推奨する信用は割符であったから、信頼を高めるためにはその基金を確保するために財政を健全化すべきだとした。1690年代のさまざまな土地銀行提案はいずれも、その基金を土地とするか貴金属貨幣とするかではなく、信頼にたる担保や基金をいかに安全に保持しているかが最大の焦点となっていたが、ダヴナントの公信用という形をとった紙券信用論も、この議論の延長線上にあることを明らかにする。第三に(2、3年目)、こうした土地銀行諸提案やダヴナントの議論の論争的文脈が、そのあとのジョン・ローの企画や南海泡沫事件前後のイングランドでの紙券信用の議論にどのように展開されていったかを見る。つまり、紙券信用の拡張か制限かの議論は、そもそもが銀行組織の基金やその安全性、管理能力といった、人的・社会的信頼性によっていたことを示したい。しかし、このあたりの資料については、私自身の知識が少ないため、**A. E. Murphy (John Law: Economic Theorist and Policy-Maker, 1997)**や、**C. Wennerlind**の研究を手掛かりとして始めたい。第四に(3、4年目)、やはり同じ文脈の上で、ジェームス・スチュアートの信用論を検討する。ダヴナントを参照するスチュアートの『経済の原理』における信用の定義は、信頼、そしてそれを確かなものとする基金だという。ここでは、エジンバラ大学の所蔵するスチュアートの膨大な量の草稿が参照される。第五に(3、4年目)、アダム・スミスの信用論を取り上げる。スミスは『国富論』第二編第二章で、手形割引によって兌換銀行券を発行するという、いわば商業銀行論の範型を展開する。ここでは20%の兌換準備という形での基金が想定され、商業手形のみを割引いていれば、インフレーションも取り付けも生じない、という真正手形の原理によって、銀行制度の安全性を保證する。しかし、他方で第四編にあるアムステルダム銀行に関する長い余論では、100%の預金準備を安全に保持するこの銀行の発行する銀行券を人々が高く評価していることを指摘している。このようにスミスの中には、彼以前の、基金そのものの物理的安全性をなによりもリスク回避の主眼とする視点と、真正手形原理を守る限りで紙券信用の拡大は可能だという視点が、併存している。実は、スミス自身『法学講義』(A・B)において、この二つのタイプの紙券信用のあり方の違いを認識しており、そこでは商業銀行こそが新しい時代に即していることを示しながらも、『国富論』でアムステルダム銀行に関する記述を長く詳細にしたうえで残し、かつ非常に高く評価したこと、そして銀行信用そのものにおいても、「自然的自由」を阻害してまでも適切に規制すべきだという議論には、17世紀以来のブリテンの紙券信用の安全性を第一とする視点の貫徹がみられる。本研究は以上の点を、手稿類を含めた一次資料を英・米各地の図書館、資料館から広く収集し、丁寧に検証し、英語原稿として報告し、最終的には英文著作としてまとめていくことを目的とする。

#### 4 . 研究成果

##### [2019 年度]

第一に、本研究の前提となる研究をまとめた英語での著作の出版に向けての作業を進め、英国の **Routledge** 社と、**English Economic Thought in the Seventeenth Century: Rejecting the Dutch Model** というタイトルの単著を出版する契約を 11 月に交わし、2020 年 2 月中に必要な原稿をすべて提出した。第二に、短期公債を紙券として用いるダヴナントの信用論を、論争史の中で分析し、'**Charles Davenant's idea of credit**'として原稿にまとめ、10 月にシドニー大学で開催されたオーストラリア経済思想史学会(**HETSA**)で報告した。第三に、土地銀行諸提案やダヴナントの議論の論争的文脈が、そのあとのジョン・ローの紙券信用の議論にどのように展開されていったかを、発券の組織の基金やその安全性、管理能力といった、人的・社会的信頼性という視点から、ローの『貨幣と商業』(1705)と、同じころ書かれたローの手稿'**Essay on a land bank**'、その前後に書かれた他の紙券信用に関する文献を調査し、2020 年 6 月に開催される予定であったアメリカ経済思想史学会(**HES**)での報告を目指し、原稿作成作業を進めた(3 月中に中止が決定)。第四に、ジェームス・スチュアートの『経済の原理』における信用論と、アダム・スミスの法学講義と『国富論』における信用論を、とくにアムステルダム銀行についての記述を中心に検討して、3 月の国際アダム・スミス学会で報告する予定で、報告原稿、'**Adam Smith on banking**'を作成したが、大会は中止となった。第五に、本研究の最終目的である、英文での著作の作成に向けた概要ともなるような内容の報告を、2020 年 5 月開催予定の日本英文学会のシンポジウムで行うべく原稿作成を進めた。

##### [2020 年度]

第一に、2019 年度中に **Routledge** 社とかわし原稿も提出していた単著について、本年度には、その校正など出版に向けての最終作業をおこない、11 月刊行した。これに伴い、約 80 冊を研究者等関係者に献本し、その後著作内容についても多くのフィードバックを得ることができた。第二に、チャールズ・ダヴナントの信用論の特徴を明らかにしようとする原稿を 2019 年度にオーストラリア経済思想史学会大会で報告したが、これを補足する一次文献を調査・分析した。第三に、ジョン・ローの銀行論についての分析をした原稿を、2019 年度に続けて作成した。これはアメリカ経済思想史学会大会で報告する予定であったが、大会が中止となった。第四に、本研究の最終目的である英文著作刊行に向けての、その内容のスケッチともなる原稿を作成し、5 月に開催される予定だった日本英文学会のシンポジウムで報告することになっていたが、このシンポジウムについてはキャンセルし、2021 年度にあらためて報告することにして、内容の改定を続けた。ここでは、ダヴナント、ロー、サー・ジェームス・スチュアート、アダム・スミスの、信用についての理解とその継承関係を、信頼という社会的・倫理的な視点からとらえなおすことを試みた。

##### [2021 年度]

第一に、昨年度に続き、チャールズ・ダヴナントの主著『公収入交易論』(1698 年)以降、1714 年までの、諸銀行案のパンフレット類の調査をし、研究ノートの作成をした。コロナ禍が続き英国への資料調査がかなわなかったため、これまでに収集した pdf 化された貴重書、英国の図書館で書きうつしたり撮影してきた手稿類、オンラインで利用できる資料(**British History Online** など)などを利用しながら調査を進めた。当初想定していたよりも、

本研究のテーマと本質的にかかわる資料が多く、それらはダヴナントやジョン・ローなどす  
でによく知られた資料と同等の注意をもって調査する必要を感じ、そのようにした。年度終  
わりころに着手した、**1714**年のアメリカ植民地ボストンでの土地銀行設立をめぐるいくつ  
かの資料では、本国ブリテンのこれまでの土地銀行論争からの影響が強くみられ、本国にお  
ける銀行諸企画を論ずるためにも、大いに参考になるものであった。第二に、当初**2020**年  
の日本英文学会で開催される予定であったがキャンセルになったシンポジウムで報告する  
予定であった原稿を、**2021**年**5**月開催の同学会でのシンポジウムで、内容を研究の進捗状  
況に合わせて改定したものにして報告した。これは、「信用」は「貨幣」のあとにくるのか？」  
というタイトルのもと、本研究の成果としてまとめて刊行する計画の著作の実質的な要約  
となるものであり、それゆえに、それまでの1年間の研究の進捗状況を反映させたものとし  
た。ここでは、英文学や歴史などシンポジウム参加の他分野の報告者との事前のオンライン  
勉強会なども含め、本研究にとっても大いに参考となる視点、情報が得られた。

#### [2022年度]

第一に、本研究及びそれにかかわるこれまでに蓄積してきた成果の概要をまとめた。従来の  
**18**世紀ブリテンの信用理論史研究によって強調されてきたような、紙券信用の量的拡大と  
それにとまなう危機に対する考察だけではなく、それら問題をめぐる当時の議論の根底で  
は、信用制度の組織、さらにはそれに関わる諸個人の道徳性が重視されていたことを明らか  
にし、「**18**世紀イギリスにおける‘**credit**’の論じられ方 思慮深さと制度」としてまと  
め、日本イギリス哲学会関東部会第**109**回研究例会で**7**月に報告した。第二に、アダム・  
スミスとジェームス・ステュアートの信用論に関する考察を、‘**Adam Smith on banking**’  
としてまとめ、**9**月にオーストラリア経済思想史学会で報告した。第三に、日本イギリス哲  
学会からの依頼により、学会展望論文を書くことになり、この機会を利用して、本研究の歴  
史研究としての主張・議論が、昨今の金融理論研究とどのようなかかわりがあるのかを検討  
し、「学会展望 貨幣・信用について今語られていること、昔語られていたこと」としてま  
とめ、『イギリス哲学研究』第**46**号(**3**月刊行)に掲載された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 伊藤誠一郎	4. 巻 46
2. 論文標題 学会展望 貨幣・信用について今語られていること、昔語られていたこと	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 イギリス哲学研究	6. 最初と最後の頁 75-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 伊藤誠一郎
2. 発表標題 18世紀イギリスにおける 'credit' の論じられ方 思慮深さと制度
3. 学会等名 日本イギリス哲学会関東部会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Seiichiro Ito
2. 発表標題 Adam Smith on banking
3. 学会等名 The Conference of the History of Economic Thought Society of Australia (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 伊藤誠一郎
2. 発表標題 「信用」は「貨幣」のあとにくるのか？
3. 学会等名 日本英文学会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Seiichiro Ito
2. 発表標題 Charles Davenant ' s idea of credit
3. 学会等名 The Conference of the History of Economic Thought Society of Australia ( 国際学会 )
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Seiichiro Ito	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 223
3. 書名 English Economic Thought in the Seventeenth Century: Rejecting the Dutch Model	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------